

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

疱瘡絵の画題と疱瘡除け

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2023-02-05 キーワード: 作成者: 石垣, 絵美, Ishigaki, Emi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000288

疱瘡絵の画題と疱瘡除け

はじめに

日本の民俗信仰の多様な伝承の中の一つに、「疱瘡絵」というものが存在する。その多くが紅一色摺、または多色摺の版画で、図柄と文言が共に書かれているものも多い。近世から近代初頭にかけて、子どもの疱瘡への罹病時に、その無事な治癒を願って用いられたものであった。

疱瘡という病気は現代ではほとんど話題にならない病気となっている。それは明治四十二年（一九〇九）の種痘法施行規

石垣絵美

則の公布などによる近代的な治療体制が整備されることによつて、罹病する子どもたちが激減していったからである。昭和五十一年（一九七六）からは国内での種痘も廃止され、疱瘡は過去の病気となった。しかし、事実の上からみれば、日本の生活史の中で疱瘡の歴史は長く、とくに江戸時代にはほとんど子どもが罹病し、生涯に一度はかかる病気とされていた。そして、死に至ることもある恐ろしい病気であり、その対処法や治療法がさまざまに工夫されてきていた。それらの歴史的事実が、日本各地の民俗信仰の中に多様な伝承習俗となって伝えられてきているのである。

現在では、疱瘡は克服されたが、子どもの成育と病気という問題は、充実した現代医療の中でも、重要な課題である。疱瘡という病気は、現在ではなくっているが、この病気をめぐる習俗には、日本人の病気への対処や観念が埋め込まれている。その一つが「疱瘡絵」であり、本稿はその分析結果を提示しておくものである。

一、先行研究と疱瘡習俗

「疱瘡絵」のこれまでの研究には、H. O. ロータモンド(一九九五)や川部裕幸(二〇〇〇)のものがあり、「疱瘡絵」の図柄と文言に、呪的な要素や祝祭性が見られること、「疱瘡絵」が流布した範囲、また「疱瘡絵」の図柄に影響を与えた3系統の浮世絵について、などが論じられている。また、藤岡摩里子(二〇〇八)が江戸の玩具研究の中で、「疱瘡絵」に描かれる江戸玩具について論じ、荻野夏木(二〇一一)が近世以降の錦絵や随筆類に描かれる疱瘡と麻疹の表象の差異について論じている。⁽¹⁾しかし、「疱瘡絵」を構成する図柄としてしばしば見られる富士山や源為朝については、それらの先行研究では論じられていない。

H. O. ロータモンドは「疱瘡神—江戸の病いをめぐる民間信仰の研究」⁽²⁾において、「疱瘡絵」29点の分析を通して、図柄と文言の構成要素は、(1) 疱瘡除けの呪的効力を持つ人物や事物により疱瘡を予防する、(2) 祝祭的な呪力により疱瘡を押さえ込む、(3) 子どもの遊びや笑い、快復を連想させるもので健康を予祝する、の3つであると指摘している。また、疱瘡に直接挑んで闘うような表現の少なさ、病氣治癒の予祝や祝祭的な図柄の多さは、疱瘡に対する人びとの無力感を反映している、と指摘している。しかし、「疱瘡絵」の中の文言の解説と、構成要素の整理は十分でなく、「疱瘡絵」の根底にある庶民の医学的知識や、主要な構成要素の一つである源為朝伝説の出処についての言及はない。また、川部裕幸は「疱瘡絵」の文献的研究⁽³⁾において、近世の育児書である香月牛山『小児必用養育草』⁽⁴⁾や、近世の滑稽本である山東京伝『腹筋逢夢石』⁽⁵⁾、また福井県大野市の旧家に残る天保元年(一八三〇)から天保十五年(一八四四)にかけて記録された「疱瘡見舞諸事留帳」⁽⁶⁾などを主な資料として、「疱瘡絵」は病人の見舞品として購入され、病家に贈られる消費が大多数を占め、護符として使用されていた、と指摘している。そして、(1) 「疱瘡絵」に書かれる絵師の名前や版元から、ほとんどが十九世紀の江戸の版元か

ら出版されたものであり、大坂でも多少出版されていること、

(2) 疱瘡罹病患者の対処方法を記録した滝沢馬琴『馬琴日記』や疱瘡見舞い帳から、「疱瘡絵」が東日本のかなり広範囲の中流町人層、下級武士層、有力農民層、農民層に流布していたこと、(3) 「疱瘡絵」発生に影響を与えた浮世絵の系統を、図柄によって、①朱鍾馗の系統、②玩具や芝居の浮世絵の系統、③護符の系統、の3つの系統に辿れると指摘している。ただし、川部はその分析対象とした「疱瘡絵」の具体的な作品を明記せず、版行年の特定方法が不明瞭であるなどの問題が残っている。このような先行研究を受けて、筆者はこれまで「病氣への理解と対処——疱瘡習俗を中心に——」と「疱瘡習俗の諸相」を通して、従来の医療民俗研究に対し、「病への理解」という視点の欠落を指摘し、民俗伝承のなかで形成されてきた呪術や神信仰などの習俗を「病への理解」と「病への対処」という二つの視点から分析することで、病への対処はその理解に対応して形成されていることを指摘した。具体的には、渡邊平太夫政通「桑名日記」¹⁰や指田撰津正藤詮「指田日記」¹¹などの近世の日記資料に記録されている疱瘡罹病者への対処が、香月牛山「小兒必用養育章」¹²、橘南谿「痘瘡水鏡録」¹³、池田霧溪「疱瘡食物考」¹⁴などの近世の育児書や医学書に記される症状の経過段階ごとの対

処と一致することから、当時の人びとが医学書の内容と同程度の疱瘡の症状に関する知識を持ち、段階ごとに行う疱瘡関係の習俗もこの知識に対応していることを指摘した。また、全国各地の疱瘡治病呪術の分析を通して、(1)疱瘡に対する呪術が、疱瘡の症状の経過段階に対応する形で伝承されていること、(2)辻に注連縄を張って疱瘡の侵入を防ぐ、疱瘡神の棚を辻に送り出すという事例から、病氣は外界から悪霊的に憑依してくるものだとする病氣観が見て取れること、(3)疱瘡をめぐる呪術は、疱瘡踊りなどの芸能や疱瘡団子を作って食べるといった食習に関する要素も含み、また疱瘡神は絵画や石塔、玩具に具象化されることから、疱瘡の表象の多様性を指摘した。

本稿では、これらを踏まえながら、「疱瘡絵」の図柄と文言の構成要素の分析を通して、疱瘡に対する人びとの対処のあり方について検討する。【表1】に、国立博物館・私立博物館・都立図書館・大学図書館・特例財団法人が所蔵する、現存する「疱瘡絵」のうち、本稿が分析対象とする「疱瘡絵」44点の類型、番号、仮題、構成要素、所蔵機関を整理した。ロータモンドが扱った「疱瘡絵」16点に新たに28点を加えて計44点を分析対象とした。「疱瘡絵」とは、次の①、②、③のいずれかの要件を持つものと判断しておくこととした。①紅一色摺りの版画、②

「疱瘡」を表す文言が見られる、③「源為朝」を表す図柄及び文言が見られる、である。以下の「疱瘡絵」の仮題の前に付す番号は、【表1】の番号に対応する。【表1】のうち、ロータモンドが扱った資料は、1、10、15、16、17、19、20、21、22、23、24、26、28、32、37、40の計16点である。

「疱瘡絵」は使用後に川に流したり、焼却したりするのがふつうであったため、現存する点数が極めて少なく、また版行年が不詳の例も多い。そこで、本稿では版行年によって「疱瘡絵」の変遷を辿るのではなく、色彩と構成要素に注目することにした。図柄と文言の構成要素を抽出し、構成要素の数が少ない単純な図柄のものから順に【表1】に整理した。【表1】の「疱瘡絵」には、(1)紅1色摺り(29点)、(2)図柄が紅摺りで文言が黒摺り(3点)、(3)2色〜4色程度の簡素な多色摺り(6点)、(4)4色以上用いた複雑な多色摺り(7点)、の4タイプが存在する。(1)タイプは、1「兒のやさきたるま」のような「疱瘡絵」を指し、(2)タイプは30「豆州八丈島鎮守正一位八郎大明神正像」のような例、(3)タイプは32「素盛雄尊・管相丞・清正」のような例、(4)タイプは「鎮西八郎為朝・疫鬼」のような例を指す。

二、疱瘡の流行と対処

(1) 疱瘡と裳瘡

日本での疱瘡の流行史などについて概観しておく、疱瘡に関する史料の初見は、『続日本紀』天平七年(七三五)の「是歲、年頗不稔。自夏至冬、天下患豌豆瘡。俗曰裳瘡。夭死者多。」という記事で、「豌豆瘡。俗曰裳瘡。」と記されている。その後、天平九年(七三七)六月に出された典藥寮勘文には「疱瘡治方夏」と見え、また本文の中にも「豌豆病」や「豌豆瘡」と記されている。¹⁷⁾この勘文に基づいて、同年六月二十六日に東海道以下六道に疫病の治療法などを指示する目的で出された太宰官符の発令には、「赤斑瘡」とある。¹⁸⁾その後は、『続日本紀』延暦九年(七九〇)に「是年秋冬、京畿男女年卅已下者、悉發豌豆瘡、俗曰裳瘡、臥疾者多。其甚者死。」、『文徳実録』仁寿三年(八五三)二月に「以穀倉院糶鹽、給京師患咆瘡者」、²⁰⁾『日本紀略』延喜十五年(九一五)十月十一日条に「有御藥咆瘡事」²¹⁾とある。承平年間(九三二〜九三八)に源順によって編纂された『和名類聚鈔』には、「咆瘡」の項目が見られ、「唐韻云 咆防教反 面瘡也 類聚國史云 仁壽二年咆瘡流行 人民疫死 咆瘡 此間云裳瘡」

と記されている。⁽²²⁾

以上から、疱瘡は、奈良時代から平安時代には、「豌豆瘡」「裳瘡」「疱瘡」「豌豆病」「赤斑瘡」「皰瘡」などさまざまな名称で呼ばれていたことが分かる。ただし、これらの記事からは、具体的にどのような症状を以て疱瘡であると断定するのか、といった内容については明らかでない。なお、富士川游『日本疾病史』⁽²³⁾は、「赤斑瘡の名称は、天平九年の官符に見えたるを始めとし、後の世に至りて、「百鍊抄」等の諸書にも見えたり。但し、その中には痘瘡にあらずして、たとえば『日本紀略』長徳四年の疫瘡を赤斑瘡とすがごとく、正しく麻疹と認むべきものあり。鎌倉時代、梶原性全の「万安方」に、(中略)赤斑瘡は傷寒発斑又は麻疹の異称なるを、痘瘡とするは非なりと言うを見れば、赤斑瘡の名称は正しくこれを用うれば、麻疹に限るべきものなれども、実際にありて、この呼称はこの時まで間々痘瘡にも用いられたることを知るべし。」と述べている。また、『続日本紀』の補注は、「天平九年の疫病が麻疹であるならば、勘文が疱瘡の治方を言うのは矛盾」であるため、「天平九年の疫病も天然痘と見てよいであろう」と述べている。⁽²⁴⁾

(2) 疱瘡と天然痘

疱瘡と天然痘との関係について、本稿の視点をここで提示しておく。医学上、天然痘は『日本医学会医学用語辞典』⁽²⁵⁾には、「痘瘡、大痘瘡、天然痘 [smallpox, variola, variola major]」と、「乳痘、牛痘、小痘瘡、種痘疹 [alastrim, bovine smallpox, cowpox, minor variola, vaccinia, variola minor]」の2項目が存在する。国立感染症研究所によると、「天然痘 (smallpox) = 痘瘡 (variola)」であり、致死率が高い (20～50%) variola major と、致死率が低い (1%以下) variola minor に分けられる、とされている。⁽²⁶⁾医学上は「痘瘡」という語は用いられているが「疱瘡」という語は用いられておらず、疱瘡は生活用語であり、医学用語ではないことが分かる。そこで本稿では、生活用語としての「疱瘡」という語を用い、この「疱瘡」を医学用語の「天然痘、痘瘡」と同一とは見なさないことしておく。

(3) 江戸時代の疱瘡

江戸時代の日本における、疱瘡流行とその対処の歴史について、歴史学においては、富士川游『日本疾病史』⁽²⁷⁾、酒井シズ『日本の医療史』⁽²⁸⁾、「病が語る日本史」⁽²⁹⁾などが整理している。それらと『明治前日本医学史』⁽³⁰⁾によると、寛政七年 (一七九五) に米

沢藩内で、389人が罹病し、内2、614人死亡したとの記録が残る。英国のジェンナー (Edward Jenner) が牛痘種痘法を発見して効果の高い疱瘡の科学的治療が可能になってくるのは、寛政十年(一七九八)以降のことである。その後、ロシアに拉致されていた日本人によって日本に種痘法が伝来して、文政七年(一八二四)頃から国内で種痘が開始される。文政八年(一八二五)秋より冬に至り疱瘡が流行しており、文政十年(一八二七)には幕府が府下に幼児の種痘を命じている。斎藤月岑『武江年表』³¹⁾の嘉永二年(一八四九)の記事には、「種痘の事、近頃より弘りし事なれど此頃牛痘をうゆる事、京師より行れ、蘭学の医師専ら是を用ふる事盛ふ行はる」とあり、この年に長崎蘭館医であるモーニツケが、長崎で国内初の牛痘による種痘を成功させた。嘉永三年(一八五〇)には、幕府の命令で水戸藩や古河藩では本間玄調や杉田玄白の弟子の河口信順等によって種痘が行なわれている。しかしその後、文久元年(一八六一)四月にも疱瘡が流行している。

筆者は、前稿「疱瘡習俗の諸相」³²⁾で、『指田日記』³³⁾を資料としてそこにみえる疱瘡罹病者と死亡者の人数の推移を分析したが、そこで、天保六年(一八三五)から明治三年(一八七〇)にかけて、ほぼ毎年疱瘡に罹病する患者が発生していること、

そのうち罹病者と死亡者が共に10名以上となった年は、天保十一年(一八四〇)に罹病12名、死亡18名と、天保十四年(一八四三)に罹病10名、死亡10名の二年であることを指摘した。また死亡者の年齢はすべて2歳から17歳の小児で、中でも2歳の小児の死亡の記録が目立つことから、疱瘡は乳幼児のかかりやすい病であったこと、短期間に多数の乳幼児が死亡していることを指摘した。

(4) 江戸時代以降の疱瘡の症状と治療法への理解

疱瘡に対して、江戸時代の医学書では次のように述べられている。まず、元禄十六年(一七〇三)に香月牛山が著した『小兒必用養育草』³⁴⁾では、疱瘡発症後の症状の経過を、熱蒸、放標、起脹、貫膿、収醫の5段階に分け、それぞれの時期に発症する症状と、対処の方法を示している。寛延三年(一七五〇)に橋本静話が著した『疱瘡禁厭秘伝集』³⁵⁾では、疱瘡罹病時の対処、また疱瘡罹病前の予防のための呪術を示し、さらに「疱瘡は胎毒より発する病なり」として、「胎毒を解す」ための呪術を示している。寛政七年(一七九五)に渡充が著した『豈瘡養育』³⁶⁾では「疱瘡十五日期日察之圖」を示し、疱瘡罹病から15日間の症状の経過段階を図で示している。また「痘ハものにあやかり

やすきゆへ、紅絹を屏風などにかけて出ものをして紅活ならしめんがためなり」として、疱瘡には赤い色が効くと述べている。

その寛政七年（一七九五）には、緒方春朔が我が国における最初の種痘書『種痘必須辨』³⁷を著している。文化十二年（一八一五）には甲斐国市川（山梨県甲府市の南方）の医者、橋本伯寿が『国字断毒論』³⁸を著し、「痘瘡を其年の氣運、時候にて流行時疫と心得、又一生に一度にかぎるを奇妙不思議の病なりと醫書に聖瘡天花瘡などと異名を附、世間の人も痘神の病しむるなど心得しは甚あやまりなり。」と述べて、痘神による病いなどという俗説を否定した。また、「毒氣と正氣と戦事甚しく實に火水の如なるをもつて暫時も正氣と和合して人の身中にとまらず、外に發するか内に陥か二ツツの勝敗を決するゆゑに、一たび病ば天稟の毒氣おのずから尽て生涯二度病ざるなり」と述べ、疱瘡を一度病むと二度病むことは無いことを説明した。

明治時代以後の日本における、疱瘡流行と本格化された種痘の実施については、川村純一『病いの克服——日本痘瘡史』³⁹が整理している。これによると、明治時代に入ると、明治政府によって明治七年（一八七四）に種痘規則の改正、明治八年（一八七五）に天然痘予防規則の制定が行われ、強制種痘の徹底が計られた。しかし当時の人びとの種痘への理解が得られ

ず、積極的な接種に至らなかったため、明治時代には合わせて4回の疱瘡流行が起こる。

大正期、昭和期にも疱瘡の大流行はあるが、昭和三十年（一九五五）に患者1名を出して、これを最後に国内の患者数は0人になる。昭和五十一年（一九七六）以降国内での種痘が廃止され、その後昭和五十五年（一九八〇）にWHOが天然痘根絶宣言を出し、疱瘡はこの世から姿を消した。

三、疱瘡絵の画題と添書き

現存する「疱瘡絵」は個人によって収集され、国立博物館・私立博物館・都立図書館・大学図書館・特例財団法人の所蔵となっているものがほとんどである。⁴⁰所蔵が博物館や図書館に限られるのは、「疱瘡絵」は使用後に焼却したり、川に流したりして処分するのが普通であったためである。また、中には川に流したものを拾ってきて売り物にしたりするせいで、絵の色も薄くなり、どんな構図かさえ見分けにくいようなものも多い。⁴¹しかし、「疱瘡絵」の特徴は別名「赤絵」とも呼ばれるように赤い色で刷られているという点である。これまでも指摘されているように、それは疱瘡の症状の赤い斑点からの類似連想であ

ろうと考えられる。本稿では【表1】に示した「疱瘡絵」44点を分析対象とする。この絵は前述のように4つのタイプに分類できるが、描かれている図柄と文言は①達磨と玩具、②富士山、③赤豆、④源為朝、が主なもので、以下では図柄とこれに記されている文言の検討を行っていく。

(1) 達磨と玩具

「疱瘡絵」には、1「兒のやさしきたるま」と、2「はやきあし達磨」のように、赤絵に達磨が描かれる例が多い。江戸時代中期の医者で、貝原益軒に儒学を、鶴原玄益に医学を学び、豊前中津藩に仕えたのち、京都で開業した香月牛山（明暦二年生、元文五年没（一六五六―一七四〇））によって、元禄十六年（一七〇三）秋に刊行された『小兒必用養育草』は、日本で最初の育児書と言われるが、全六巻のうち四巻と五巻は、すべて疱瘡について述べている。『小兒必用養育草』四巻の「痘瘡の病人、居所しつらひやうの説」に「屏風衣桁に、赤き衣類をかけ、そのちごにも、赤き衣類を著せしめ、看病人も、みな赤き衣類を著るべし、痘の色は、赤きを好とする故なるべし」とあり、これにより元禄十六年（一七〇三）の時点で、疱瘡罹病時に身体に発生する発疹の色に類似する赤い色を痘瘡は好むと

いう認識が存在したこと、そしてその赤い色の衣類を着れば重篤にならずに快癒するという認識が存在したということが分かる。

文化十二年から天保十三年（一八一五―一八四二）の間のもとと推定される27「紅梅・喜目舞」には、その赤い達磨が描かれている。1「兒のやさしきたるま」の文言を読むと、「起きたがる兒のやさしきたるまかな」とあり、これには「起きたがる」を「たるま」に掛け、静かに寝ているのをいやがり起きた遊びたがる子どものこと、そして同時に長く寝込むことなくだるまのように早く起き上がり病気が快復することへの祈願が示されている。疱瘡治癒に有効な赤色、倒れても起き上がるという特徴、そこから達磨が疱瘡治癒祈願に有力な縁起物として「疱瘡絵」に多く用いられていた理由がうかがえる。

次に、3「豆太鼓あし乃達磨」と、4「持遊びもふんだるたるま」と、5「竹馬乃友たち：おきあがり小法師」のように赤絵と達磨の中に、でんでん太鼓、まさる、春駒、犬張子、風車などの、子どもがよく手にする縁起物の玩具が付加されている例も多い。犬張子やでんでん太鼓などは、出産祝いに組み合わせて贈る玩具としても用いられたことから、小兒の成長と健康を祈願するための玩具図が、「疱瘡絵」にも流用されたと理解

できる。文言にも、4「持遊びも ふんだるたるま一日も寝ずにささ湯は おめてたひとく野 せん豆そえてちや漬のさらくと 軽くしてとるこふのものかな」、8「もてあそぶ 犬や達磨にも軽く 湯のふ峠を楽に越へけり」、10「張杖の 達磨も犬も疱瘡の 見舞にかるき 手遊びにして」のように、「もてあそぶ」や「手遊び」という言葉が多出しており、疱瘡に罹病した子どもが、疱瘡治療、疱瘡除けの効力のある玩具を弄ぶことによつて、効力が出ると考えられていたようである。そして、それと同時に、じつと寝ているのが嫌で何かと動きたがる子どもに玩具を与えたり玩具の絵を見せたりして機嫌をとろうとした大人たちの気配りもうかがえる。

(2) 富士山と「山あげ」

「疱瘡絵」の中には富士山を描いたものが多い。11「富士山・為朝・鍾馗・達磨①」や、15「富士山・為朝・達磨・金太郎②」や、16「富士山・為朝・鍾馗・達磨・桃太郎」は、縁起物としての達磨に加えて、源為朝や鍾馗のような疫病除けの武将や神仏、金太郎や桃太郎等の力童、そして富士山が加わったものが描かれている。文言を見てみると、11「疱瘡の 身も富士ほどに山をあけ 正氣ですく寿 たるま為とも」、12「疱瘡の 身

も富士ほどに山をあけ 正氣ですく寿 たるま為とも」、14「疱瘡の 身も富士ほどに山をあけ 正氣ですく寿 だるま為とも」がほぼ同じ内容で、その他は13「為ともの 弓張上ケる富士よりも 正氣でかるかる おきる朱だるま」、15「をさな子かきけむ遊びの手にかるく 山もあけたる はりぬきの不二」、16「疱瘡は 三國一のかろかろと ふしの山をも 上ケる富士」、17「山もあけたるはりぬきの不二」、「ふしの山をも上る」というように、「山をあける」という言葉が共通して使われている。この富士山や「山をあける」という文言は、近世期の医学書や日記に出てくる疱瘡の症状の経過段階の一つである「山あげ」を意味しているものと考えられる。

香月牛山は『小兒必用養育草』巻四の「痘瘡始終日数の説」において、疱瘡発症後の症状の経過を次の5段階で記している。⁴⁹⁾

熱蒸とて、三日あり、和俗ほとをりといひ、又は序熱といふなり、
 放標とて、三日あり、和俗出そろひといふなり、
 起脹とて、三日あり、和俗水うみといふなり、

貫膿とて、三日あり、和俗山あげといふなり、

収斂とて、三日あり、和俗かせといふなり、

かくのごとく、三日づゝにて、十五日を経て後、落痂とて、

瘡のふた落て愈るを、順症といひて、薬を服するにも及ば

ず、又夫よりも軽き症は、首尾十二日にて、かせて愈るも

あり、逆なる症は、何かと、變ずる事多くして、二十餘箇

日三十日あまりもかゝりて愈もあり、或は死するに至るあ

り

牛山はここで、「山あげ」は疱瘡発症から最終段階までの15

日間のうち、10日目〜12日目の期間を指す言葉として用いてい

る。そして、疱瘡が軽い症状で済む場合は、「山あげ」の段階

が済んだ12日目で膿疱の表面が乾いて癒えたと述べている。ま

た『小兒必用養育草』巻四「痘瘡生死を決する日期の説」では、

疱瘡罹病患者の生死を決める時期は、発症から6日目か9日目

或は11日目か14日目であると、重い疱瘡に罹病した場合には、

「山あげ」という「成就」をすることなく死ぬと述べられている。⁽³⁰⁾

したがって、「山あげ」は患者の生死を決める重要な段階

であると認識されていたことが分かる。以上の点から、「山あげ」

を過ぎて順調に快方に向かうこと、即ち軽い疱瘡で済むことが

望まれ、「山あげ」の期間を無事終えることが、疱瘡患者にとつ

て回復に向かう非常にめでたいことと認識されていたのである。

こういつた「山あげ」を無事に済ませ、快方に向かうこと

を予祝する心意が、凶柄としては富士山によって表現され、文

言としては、11、12、14の「正氣ですく寿」や、13「かるかる

おきる朱だるま」、15「かるく山もあけたるはりぬきの不二」、

16「かるかるおふしの山をも上る」などによって表現されてい

たのである。つまり、富士山は「山あげ」への祈願の意味をも

つ類似連想による凶柄だったと考えられるのである。

(3) 疱瘡絵の文言と赤豆

「疱瘡絵」の文言の構成要素についてみると、第一に、「かる

かる」、「さらさら」などの言葉を用いて、疱瘡が軽く済むこと

をその副詞的な言葉で願うタイプと、第二に、「豆太鼓」や「大

角豆」、「あづき」などの赤い豆という文字と言葉で、治癒を願

うタイプとがある。

第一の、いわば「かるかる・さらさら」タイプは以下のとお

りである。

2 「ほうさうの なミのおとよき ミずかみを かるくも

はやき あし達磨かな」

4 「持遊ひも ふんだるたるま一日も寝ずにささ湯はおめてたひ とと野せん豆そえてちや漬のさらさらと 軽々してとる こふのものかな」

6 「二ツ三ツ かるかるあがれよ はるのこま」

7 「かるすぎて 寝た事のないだるまより じつとして居ぬ この風車」

13 「為ともの 弓張上ケる富士よりも 正氣てかるかる おきる朱だるま」

第二の、いわば「赤豆」タイプは、以下のとおりである。

18 「はらはらと かほに三つ四つ 豆太鼓」

21 「早咲の 梅のつぼみも二ツ三ツ 雪に色よき犬のあし跡」(これは豆ならぬ犬の足跡だが)

27 「紅梅□のるさまの赤□軽々と 一荷十六大角豆哉 名月やとりわけ搔ゆき草の露 引つさける千両軽し えびす 講喜目舞」

33 「ほうそうは かるくしあげて豆太鼓 寝ねける?あつき うさぎみみづく」

このことに関連して、『小児必用養育草』巻四「痘瘡の形色の善悪の説」には、「痘の形は、尖圓にして、大きに起脹の時にいたつて、大豆を見るやうにして、手にてその上をなづるに、さらさらとして、膿をいづばいに持たるを、最上吉の痘といふ」とある。⁽⁵⁾つまり、さらさらとした大豆のように膿を多く含んだ丸い痘(膿疱)の形が症状としてはもっとも良いとされており、痘(膿疱)の色に関しては前述した通り、赤い色が良い色であるとされている。したがって、これらはいずれも症状としては良い状態にある疱瘡の痘の様相を示すことで、それに類似して症状が軽く済むことを願っているものといえる。

その他にも、28「□□疱瘡も あとなくさめて見し夢の 佛うつる鍾馗大臣」のように、「あとなく」という言葉を用いて、痘痕が残らず綺麗に疱瘡が治癒することを願っているものもある。これらは疱瘡による最悪の場合の死への恐怖などの緊迫感のゆるい例である。また、31は、

疱瘡養生艸 年々天一天上の日の 水にてゆあみせば 疱瘡をのがるなり 初日より二日置に奇應丸一粒つつのますべし むしおさへの専一あり 又のんどつまりし時は

南天の実を猪口に一盃ほどせんじ用うべし すみやかにとふるなり 山のがらぬ時はからしをせんじ と湯をつかはすべし 山あがること少なり 家内へいれぬもの 其子の母親髪結ことをいむべし 第一房事貝藻ハ七十五日いむなり 紫染不浄物 本うみまではせいにつよきものをしよくすべし 本うみのちハ あふらものるい そうじてわろし

と、疱瘡罹病を予防する方法や、罹病した際に飲むべき薬、どの症状が出た時にどのような対処を行うべきか、忌むべき行為や食物などについて具体的な対処法を示している。

以上のような「疱瘡絵」の構成要素からみれば、前述した「山あげ」タイプも含めて、近世期の医学書や育児書からの影響と、それによる疱瘡の症状に対する人びとの経験による一定の共通の知識や理解があったことが分かる。これらの知識は、「疱瘡絵」だけでなく、疱瘡踊りの歌詞にも見られる。そしてそこには、死への恐怖感や緊迫感よりも、疱瘡への生活感覚的な慣れと、症状の変化に寄り添いながら類似連想的な力を信じて自然な治療へ向けて祈願する、という疱瘡対処の姿勢がうかがえる。

(4) 為朝と疱瘡

「疱瘡絵」の構成要素として目立っているものとして、もう一つ注目されるのが源為朝である。なぜ「疱瘡絵」に源為朝の伝説が描かれるのかを考えてみる。

図柄に源為朝が見られるのが、11、12、13、14、15、16、29、30、31、37、38、39、40、41、42、43の16点である。その図柄と文言の構成要素について分類してみると、3つのタイプが存在する。まず、aタイプは、紅一色摺で、源為朝が鍾馗、達磨、富士山などの他の要素と混合して描かれ、疱瘡の症状の一つである山あげをも意味しているもので、11、16、31がそれに該当する。次の、bタイプは、源為朝と疫鬼がセットで描かれているもので、29、37、38、39、41、42がそれに該当する。次の、cタイプは、源為朝の図柄と伝説がセットで描かれているもので、30、40、43がそれに該当する。

そこでこのうちのcタイプの源為朝伝説について検討してみよう。30の文言には、

豆州八丈島鎮守 正一位八郎大明神 正像 抑鎮西八郎為朝臣は清和源氏乃嫡流六條廷尉為義公の八男也 (中略)
御年中為朝八丈島の濱辺に出て絶景を望たまふに一人の老

翁筵に乗て波に漂ひ兎角して此渚に就く為朝熟翁の奇異なるを不審り汝何にしてか浪に浮かみて此に来る。そも何ものならんやと問ふ老翁答へて我ハ痘瘡神の性なりといふ為朝之を聞いていたく声をいらち吾この島に在て万民を撫育し國中安全を祈の外他なし故に山野に賊なく疫神の愁なし況や 狐狸の人を惑すに於てをや我人の愁あるを知りて不止ハ弓矢神の穢也 汝はやく此地を去べし若我云う所にそむき島人を悩さバ敢て赦さじと 老翁勇氣に怖れて低頭なし手を拜き末世の後まで再び不可来と誓ひ又筵に乗て蒼海を走り退しと云云 今に到るまで八丈の島人此患を知らず

とあり、40の文言には、

八丈島の鎮守 正一位為朝大明神来由 鎮西八郎為朝公六條判官為義公の八男にして武勇絶倫怪力無双強弓名譽の勇将也 (中略) 或日濱邊に壹人の翁漂着し島人に向て申さく 我ハもかさを護る神也汝杯早く赤の飯杯酒杯の供物を捧げ宜しく我を信ぜよと言 島人聞きて驚駭くを為朝早くも聞召此所に来来玉ひ疱瘡神を吃りこらし 汝ハ世人を苦

しましむる邪神にて有けるが我かくて在りからハ此島あらん限り此地の土を不可踏 亦我姓名を印したる家へも入ることななかれ この二ヶ条を守らずバ目に物見せんと怒り玉へバ 疱瘡神ハ恐れおののき免し玉へ仰せの赴決して背き申すまじとて一通の証書に手判を押して参らせけるとぞ 斯て後今の世に至まで彼島に此病患なく又この神に疱瘡の願をかければ皆軽々と平癒なすとぞいと賢こき神徳也

とある。文献上の為朝の初出は『保元物語』であるが、そこには直接疱瘡と為朝とを関連付ける記述はないものの、「いかなる悪魔、行疫神も、面をむくべきやうはなし」と、為朝と悪魔や行疫神との関係は出ている。⁽³⁵⁾

次に為朝の八丈島における疱瘡神調伏伝説発生の背景を検討するため、各地の為朝伝説を収集してみた。⁽³⁶⁾ 22事例が確認できたが、為朝と疱瘡との関連が見られる伝説は、東京都八丈島に伝わる1事例のみである。その伝承は、次のような内容である。⁽³⁷⁾

おおむかしの話でおじやる。為朝が女護が島から大島に帰るとき、海上で不思議なものを発見しました。それは一尺

四、五寸くらいの小さい、やせこけた老人が、赤い旗を立てたタライに乗って浮かんでいるのです。為朝がそのあやしげな老人にむかって、「われは為朝であるが、なんじは水の怪か、地の怪か、すみやかに返答せよ！」といいながら、左手に強弓をにぎりしめて、ハッタとばかりにらみつけました。返答によっては射ころす考えでした。為朝の威厳に恐れをなしたのか、不思議な老人は、タライの上に平伏すると、「われは、水の怪でも、地の怪でもおじゃらない、痘瘡の神でおじゃる。このごろクニ（内地）で痘瘡をイッパイはやらせ申したが、もうつまらなくなり申したので、新しい天地をもとめて海上にただよっているとおじゃる。うわさによると、これから南に女護が島とか申すところがおじゃるとのことなので、そこでも行き、痘瘡をはやらせようと、今思案したところでおじゃる。」と答えました。これをきいた為朝は、顔を真赤にして、「このヤクビヨウ神め、女護が島にはわしの大事な二人の子供が住んでいる。もしなんじが行って痘瘡をはやらせたら、子供たちの命があぶない。これから先きに一步でも進むなら、わしの弓矢でなんじをタライごと海底に射沈めてやるぞ：」とどなりつけました。痘瘡の神は、為朝の勢いにち

ぢみあがり、「とんでもない、命あつてのものだねでおじゃる。お身の弓矢にかかれば、われらのごときヤクザ（弱虫）は、ひとたまりもおじゃらぬ。これからは、われらの仲間にもフレ（布令）を出して、女護が島へは絶対に近よらないようにし申すから、命だけは助けてたもうれ」と頭をさげました。為朝はそれをきいて、顔色をやわらげ、「そうなくてはならぬことじゃ。なんじが心をあらためたなら、命だけは助けてつかわす。その小さなタライに乗って、クニまで引きかえすのも大変であるうから、わしの船でクニまでおくりとどけてつかわそう」といって、痘瘡の神を自分の船へ乗りうつらせ、大島につれてかえってから、さらに伊豆の国地へおくりとどけてやりました。そのため、女護が島では、痘瘡の病を知らなかつたという話でおじゃる。

この伝説は、前掲の「痘瘡絵」の30と40の文章の内容と一致する。この伝説を収集した浅沼良次によれば、この原話は滝沢馬琴の『椿説弓張月』^⑧であるといい、その『椿説弓張月』の記事は、次のとおりである。

後編第十九回 為朝の武威痘 鬼を退く

浩^か處^かに澳^{おき}のかたより。米^よ俵^ねの蓋^{ふた}に。赤^{あか}き幣^{ぬき}を建^たてて。
身^み丈^{ぢやう}僅^ひに一尺四五寸もあるらんとおほしく。いとからびた
る翁^{おきな}。その上に乗りて。浪^{なみ}のまにまに流れよるにぞ。太
郎丸^{たうまる}二郎丸^{にらうまる}は。もろ共に魔^まて。聲^{こゑ}高^{たか}やかにむつかり給^{たま}へ
ば。為^な朝^{あさ}かの翁^{おきな}を估^きとにらまへて。汝^なは是^{こゝ}れ。水^{みづ}の怪^{あや}敷^し地^ぢ
の怪^{あや}敷^し。とく退^ま出^でよと叱^{しか}り給^{たま}へば。翁^{おきな}大^{おほ}いに怕^{おそ}れて。俵^た
上に拜^{まが}伏^ふし。僕^{わが}は魑^ち魅^め魑^ち魅^めの属^{たひ}にあらず。そなはち世^よに
いふ痘^{あせ}。鬼^{おに}是^{こゝ}なり。近^{ちか}會^{あひ}京^{きやう}攝^{とつ}の間^まにあつて。もつはら痘^{あせ}
を流^は行^{やう}したるが。浪^{なみ}速^{はや}の浦^{うら}に送^{おく}り遣^やられて。大洋^{おほ}洋^{やう}に漂^{しほ}流^りし。
事^{こと}の叙^{じゆ}。この島^{しま}はむかしより。痘^{あせ}瘡^{そう}を志^しらずと聞^きき。且^{しか}
く足^{あし}を休^{やす}んとおもひつるに。はからずも君^{きみ}が武^ぶ徳^{とく}灼^{やく}然^{ぜん}なれ
ば。はしなく陸^{りく}に上^ある事^{こと}かなはず。免^まさせ給^{たま}へ。向^{むか}後^ごわが
黨^{ともがら}にも令^あ志^しらして。こゝへは立ちもよらじと賂^{わぶ}れば。為^な
朝^{あさ}や、顔^{かほ}色^{いろ}を和^なげ。さこそあらめ。此^{こゝ}島^{しま}にはわが子どもら
もあり。加^か旃^{せん}往^{わう}古^こより痘^{あせ}瘡^{そう}を志^しらぬ島^{しま}人^{ひと}の。俄^{にわか}頃^{ころ}にこ
れを病^{やま}ときは。非^ひ命^{めい}の死^しをなすもの多^{おほ}かるべし。汝^な等^らふた、
びこの島^{しま}へ来^きることなかれ。さらば送^{おく}り得^えさせんとて。
懸^{やが}て船^{ふね}に引^ひきのほし。遂^{すなは}ち大^{おほ}島^{しま}へ射^やて歸^{かへ}り。彼^か處^{こゝ}より又^{また}伊^い
豆^{まめ}の國^{くに}府^ふへ送^{おく}り給^{たま}ひしとぞ。このゆゑに八^{はち}丈^{ぢやう}には、今^{いま}もて
痘^{あせ}瘡^{そう}なしといへり。是^{こゝ}併^あ。為^な朝^{あさ}の武^ぶ威^い揭^あ焉^いゆゑなるべ

し

ここで描かれている疱瘡神は、「米俵の蓋に。赤き幣を建て」
た翁の姿で、「近會京攝の間にあつて。もつはら痘瘡を流行し
たるが。浪速の浦に送り遣られて。大洋に漂流し」て、八丈島
に流れ着いたというのであり、それは各地で伝承されている疱
瘡への罹病時に棧俵に赤幣束を刺して、赤飯を載せて送り出す
疱瘡送りの習俗をふまえて描かれているといつてよい。「疱瘡
絵」にも棧俵に乗って漂流する疱瘡神の姿などが描かれている
例として、37、38、39、41などがあげられる。つまり、この文
化四年から五年（一八〇七—一八〇八）に刊行された滝沢馬琴
の『椿説弓張月』こそが、為朝による疱瘡神調伏伝説の初出で
あり、もともとのその情報発信源であった可能性が高いといえ
る。『椿説弓張月』の流通とともに、為朝の疱瘡神調伏の民俗
信仰が流通していき、格好の「疱瘡絵」の画材となつていつた
と考えられるのである。

論点

本稿の論点をまとめておくと、以下の9点である。

(1) 「疱瘡絵」には、(1)紅1色摺り、(2)図柄が紅摺りで文言が黒摺り、(3)2色〜4色程度の簡素な多色摺り、(4)4色以上用いた複雑な多色摺り、の4タイプが存在する。

(2) 「疱瘡絵」に描かれている疱瘡の症状と治療法への人びとの理解には、江戸時代の医学書における知識が反映されており、症状の展開と快復までの道筋を示すことで人びとを安心させる効果があったものと考えられる。

(3) 疱瘡治病に赤色が有効であるという認識は、元禄十六年(一七〇三)刊行の『小兒必用養育草』の時点ですでにみられた。

(4) 「疱瘡絵」に多く赤絵を用いたり、赤い色の衣類を着るなどする背景には、疱瘡の赤い発疹に通じる類似連想的な考え方が認められる。

(5) 「疱瘡絵」の図柄にだるまが多く描かれた背景には、だるまの「起き上がり」の発想と、静かに寝ているのを嫌がり、起きて遊びたがる子どもをなだめ、長く寝込むことなくだるまのように早く起き上がり病気が快復するように、という祈願の意味があったと考えられる。

(6) 赤絵のだるまの中に、正月の縁起物の玩具類が付加されているのは、療養中の子どもをなだめる工夫があった。

(7) 赤絵のだるまの中に、「富士山」の図柄が描かれているの

は、疱瘡の症状にあわせて15日間くらの展開過程における、3日「ほとをり」・3日「出そろひ」・3日「水うみ」・3日「山あげ」・3日「かせ」のうち、無事に「山あげ」に至ればもう安心、という意味が込められており、富士山はその「山あげ」への祈願の意味をもつ図柄であった。

(8) 「疱瘡絵」の中の源為朝という要素は、文化四年から五年(一八〇七〜一八〇八)に刊行された滝沢馬琴の『椿説弓張月』の記事がその発信源であったと考えられる。

(9) 「疱瘡絵」の構成要素に注目した本稿の分析からは、死への恐怖感や緊迫感よりも、疱瘡への生活感覚的な慣れと、症状の変化に寄り添いながら類似連想的な力を信じて自然な治癒へ向けて祈願する、という人びとの疱瘡対処の姿勢がうかがえる。

以上、本稿では、疱瘡をめぐる人びとの対処を扱ったが、現代においても子どものかかる病気には、麻疹、みずぼうそう、インフルエンザ、おたふく風邪、川崎病などが見られ、子どもの成育と病気という課題は、今後も追求する必要がある。疱瘡は近代から現代にかけての治療体制の整備によって克服された病気と言えるが、疱瘡をめぐる民俗伝承は、その過程で様々な形で残存しており、その意味からも、本稿は世代的な研究責任として検討しておいたものである。

注

- (1) 藤岡摩里子『浮世絵のなかの江戸玩具——消えたみみずく、だるまが笑う』二〇〇八、社会評論社、荻野夏木「伝承と絵画に見る疫病神——近世以降における疱瘡と麻疹の表象——」説話・伝承学会『説話・伝承学』第19号、二〇一一
- (2) ハートムット・O・ローテルムンド「疱瘡神——江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究——」一九九五、岩波書店(Hartmut O. Rotermund『Hosogami ou la petite vérole aïémént』1991)
- (3) 川部裕幸「『疱瘡絵』の文獻的研究」国際日本文化研究センター『日本研究 国際日本文化研究センター紀要』第21集、二〇〇〇、角川書店
- (4) 香月牛山『小兒必用養育草』元禄十六(一七〇三)(黒川眞道・小瀧淳校、同文館編纂局編纂、香月牛山著『日本教育文庫 衛生及遊戯篇 小兒必用養育草』一九一一、同文館)
- (5) 山東京伝『腹筋逢夢石』文化七(一八一〇)(山東京伝著、林美一校訂『江戸戯作文庫 腹筋逢夢石』一九八四、河出書房新社)
- (6) 福井県大野市旧家「疱瘡見舞諸事留帳」天保元(一八三〇)〜天保十五(一八四四)(南川伝憲「疱瘡の伝来と越前大野藩」『えちぜんわかさ福井の民俗文化』一九一一、福井民俗の会)
- (7) 文政九年から嘉永二年(一八二六〜一八四九)にかけて、滝沢馬琴が著した『馬琴日記』には、天保二年(一八三一)に馬琴と同居しつつあった嫡男宗伯の幼児であるお次と太郎が、疱瘡に罹病し、ふたりの罹病に際して、患者周辺の人物が、様々な対処をする様子が記されている。その天保二年(一八三一)二月九日の記事に「お次方江張子たる磨壹并に昨日申付候あかねもめん、ひとつ身ひとへ物・同づきん出来。此品、清右衛門方より差遣し申置よしにて、昨日わたし置候金壹朱返納。則、任其意、請取おく。昼前痘神棚、飾之。丁の方空、利方に
- に付献供等、備之。(中略)お次疱瘡の守札并に護符等、申請、暮六時前帰宅。帰路、為朝の紅絵かひ取持参。白山神主さしづに任せ、右守札、痘神棚に貼じ、供物等神主さしづの如く、奉祭之。八丈島為朝神影、旧來所持の分も二幅同断。」という記述が見られ、「張子たる磨」や「あかねもめん」が疱瘡罹病患者である「お次」に贈られ、「疱瘡の守札」、「護符」、「為朝の紅絵」、「八丈島為朝神影」などを買ってきて、「痘神棚」に貼る、などの対処がとられたことが分かる。(滝沢馬琴著、暉峻康隆他校訂『馬琴日記』第2巻、一九七三、中央公論社)
- (8) 拙稿「病気への理解と対処——疱瘡習俗を中心に——」『伝承文化研究』第13号、二〇一五、國學院大學伝承文化学会
- (9) 拙稿「疱瘡習俗の諸相」南開大学外国語学院東アジア古代学研究所センター、「東アジア文化研究」編集委員会『東アジア文化研究(东亚文化研究)』第1号、二〇一六、國學院大學大学院文学研究科
- (10) 渡邊平太夫政通『桑名日記』天保十(一八三九)〜嘉永元(一八四八)(谷川健一『日本庶民生活史料集成』第15巻、一九七一、三一書房)
- (11) 『指田日記』は、武蔵国多摩郡中藤村(現東京都武蔵村山市)の陰陽師、指田摂津正藤詮によって、天保五(一八三四)〜明治四(一八七一)にかけて著された日記である。(武蔵村山市立歴史民俗資料館『注解指田日記上巻』二〇〇五、武蔵村山市教育委員会、武蔵村山市立歴史民俗資料館『注解指田日記下巻』二〇〇六、武蔵村山市教育委員会)
- (12) 前掲(4)
- (13) 橘南銘『痘瘡水鏡録(痘瘡手引草)』安永七(一七七八)、国立国会図書館蔵
- (14) 池田霧溪『疱瘡食物考』天保十一(一八四〇)、国立国会図書館蔵
- (15) 中野操は『錦絵学民俗志』一九八〇、金原出版において、「総して『疱瘡絵』はいたみのひどいものが多い。疱瘡が癒えると、枕屏風などに貼ったまま川に流したりするのを拾ってきて剥がして売り物にするせ

いで、紅絵の色も失われて薄くなり、どんな構図かさえも見わけにくいが多い。」と述べている。

- (16) 『続日本紀』天平七年是歳条
- (17) 『朝野群載』天平九年六月典藥寮勘文
- (18) 『類聚符宣抄』天平九年六月二十六日太政官符
- (19) 『続日本紀』延暦九年是歳条
- (20) 『文徳実録』仁寿三年二月是月条
- (21) 『日本紀略』延喜十五年十月十一日条
- (22) 源順『和名類聚鈔』(正宗敦夫編『和名類聚鈔』一九七七、風間書房)
- (23) 富士川游『日本疾病史』一九六九、平凡社
- (24) 前掲(16)
- (25) 『日本医学会医学用語辞典』によると、日本語と英語の対応関係は、「痘瘡 (variola, smallpox)」「大痘瘡 (variola major)」「天然痘 (variola major, variola, smallpox)」「乳痘 (bovine smallpox, alastrim)」「牛痘 (cowpox, bovine smallpox, alastrim)」「小痘瘡 (variola minor, bovine smallpox, alastrim)」「種痘瘡 (vaccinia)」「こなごつる。(日本医師学会『医学用語辞典WEB版http://jams.med.or.jp/dic/mdic.html)』
- (26) 国立感染症研究所 (<https://www.niid.go.jp/niid/ja/>)
- (27) 前掲(23)
- (28) 酒井シズ『日本の医療史』一九八二、東京書籍
- (29) 酒井シズ『病が語る日本史』二〇〇二、講談社
- (30) 日本学士院日本科学史刊行会『明治前日本医学史』第3巻、一九七八、臨川書店
- (31) 斎藤月岑『武江年表』正編嘉永三(一八五〇)、続編明治十五(一八八二)(斎藤月岑著、朝倉無声校訂『武江年表』一九二二、国書刊行会)
- (32) 前掲(9)
- (33) 前掲(11)
- (34) 前掲(4)
- (35) 橋本静話『疱瘡禁厭秘伝集』享和三(一八〇三)(雅俗の会編『中野三敏先生古稀記念資料集、雅俗文叢』二〇〇五、汲古書院)
- (36) 波充『痘瘡養育』寛政七(一七九五)、国立国会図書館蔵
- (37) 緒方春朔『種痘必須辨』寛政五(一七九三)、沖繩県立図書館貴重資料デジタル書庫蔵
- (38) 橋本伯壽『国字断毒論』文化七(二八一〇)(森嘉兵衛、谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第7巻飢饉・悪疫、一九七〇、三一書房)
- (39) 川村純一は『病いの克服——日本痘瘡史——』一九九九、思文閣において、厚生省による「全国累年痘瘡患者及び死者数」(厚生省公衆衛生局『検疫制度百年史』一九八〇、ぎょうせい)所載の、明治九年(一九三四)から昭和五十三年(一九七八)までの疱瘡罹病患者数と死者数を参考に、明治時代以後の疱瘡流行と政府による種痘実施の歴史を整理している。
- (40) 【表1】にあげた「疱瘡絵」を所蔵しているのは、国立歴史民俗博物館(旧侯爵木戸家資料、内田邦彦旧蔵錦絵コレクション)、東京都江戸東京博物館(武田科学振興財団杏雨書屋)、内藤記念くすり博物館、東京都立中央図書館、日本大学医学部図書館、順天堂大学(山崎文庫)、東京大学総合図書館(鶯軒文庫の土肥慶蔵資料)、東京大学社会科学情報研究所、日本医学文化保存会である。そのうち国立歴史民俗博物館の資料が22点と約半数を占める。
- (41) 前掲(15)
- (42) 達磨は禪宗の始祖である達磨大師の座禅姿をうつしたもので、糸を吐き始めた蚕を入れる「上簇」にちなんで、起き上がり達磨は養蚕の縁起物とされる。(木村吉隆『江戸の縁起物——浅草仲見世 助六物語』二〇一一、亜紀書房)

- (43) 前掲(4)
 (44) でんでん太鼓は、赤ん坊をあやす玩具で、鬱金で染めた麻紐には、麻のように丈夫に育ってほしいとの願いが込められている。(木村吉隆「江戸の縁起物」浅草仲見世 助六物語二〇一一、亜紀書房) 一方で、3の文言には、「豆太鼓」と書かれており、疱瘡の膿疱(豆)に掛けて「豆太鼓」を描いたとも考えられる。
- (45) まさるは、福島県各地で年末年始に露天で売られる正月縁起物で、竹弓の弦にウサギの白い毛がついた素焼きの土鈴が付いているものであるが、「疱瘡絵」においては鯛が付いている。まさる(魔去る)を意味するため、疱瘡除けの効力を期待され用いられたと考えられる。まさるの弦に付いた鯛は、疱瘡治療に効力のある赤色をしていることに加え、「おめでたい」を意味し、疱瘡治療を予祝する機能をも有する。
- (46) 春駒は予祝のための門付け芸で、邪鬼を祓うためのものであるが、江戸時代に子どもの玩具となったものである。邪鬼を祓うという点で疱瘡除けに効力を發揮すると考えられたのであろう。(木村吉隆「江戸の縁起物」浅草仲見世 助六物語二〇一一、亜紀書房)
- (47) 犬張子は、安産祈願、出産見舞い、お宮参りの贈物として用いられる玩具であるが、病氣除けとして親が子どもに与える代表的な玩具でもある。犬(去ぬ)の意味を持ち、病氣が去るのである。(木村吉隆「江戸の縁起物」浅草仲見世 助六物語二〇一一、亜紀書房)
- (48) 木の緑起物「浅草仲見世 助六物語」二〇一一、亜紀書房
 書房
 前掲(4)
- (49) 前掲(4)
- (50) 前掲(4)
- (51) 前掲(4)
- (52) 千葉県松戸市七右衛門新田で二月一日に行われる、「疱瘡日祭り」の唄の歌詞に、「こんにちのがみさまはみずうみかかりて、山高く軽

- く駿河の、富士の山」(上野勇・日向野徳久・高橋武子・浅野明・原福雄・直江広治・和田正洲「関東の民間療法」一九七六、明玄書房) という文言があり、「疱瘡絵」の「山あげ」を連想させる富士山と共通する。また、鹿兒島日置郡阿多村の踊疱瘡の唄の歌詞に、「お疱瘡は三つで軽いと軽いと。顔にや三つ四つ身にやたま七つ。メダタイムデータイナ」(馬場富子「民謡の禁忌について」日本民俗学會編『日本民俗学』第4巻第2号、一九五七、実業之日本社) という文言があり、「疱瘡絵」の「かるかる・さらさら」といった文言と共通する。
- (53) 『保元物語』成立年代不明・最古写本(文保二(一一三二))
 『かの為朝は(中略)きりやう・ことながら・つらたましゐ、誠いかめしげなるもの也。其たけ七尺にあまりたれば、不通の者には二三尺計指あらはれたり。生付たる弓取にて、弓手のかいなめてより四寸長かりければ、矢づかをひくこと十五そく、弓は八尺五寸(中略)鎧かるげに着なし、小具足つまやかにして、弓脇にはさみ、烏帽子ひきたてゆるぎいでたる形勢は、かの刀八咫沙門天の悪魔降伏のために、忿怒のかたちをあらはし給ふもかくやおほえてをびたし。いかなる悪魔・行疫神も、面をむくべきやうはなし。』
- (54) (新編)日本古典文学全集41、柳瀬喜代志校注「将門記、陸奥話記、保元物語、平治物語」二〇〇二、小学館)
- 青森県から鹿兒島県までの日本各地の為朝伝説は22例収集できた。紙幅の閑係上ここではそれらをすべて掲示しないが、それらの伝説は、鎮西八郎とも呼ばれた為朝が13歳から15歳まで居住したとされる九州地方、または為朝が保元の乱に敗れ配流された八丈島に集中して存在することが確認できた。また為朝伝説の内容は大きく、ア、為朝が何かを退治する伝説(大蛇・龍退治、鬼退治、猿退治、疫鬼退治)、イ、為朝の強弓や怪力を強調する伝説、ウ、為朝の行為が特定事物や場所の由来となる伝説、の3つのタイプに分けられる。

(55)

浅沼良次『八丈島の民話』一九六五、未来社

(56) 曲亭馬琴作、葛飾北斎画『椿説弓張月』前編六冊文化四(二八〇七)、

後編六冊統篇六冊文化五(一八〇八)、拾遺五冊文化七(二八一〇)(滝

沢馬琴『古典叢書 滝沢馬琴集』第一卷、一九八九、誠晃社)

【表1】疱瘡絵一覧

類型	No.	資料仮題	構成要素		所蔵機関
			図柄	文字	
(1)紅一色摺	1	兒のやさしきたるま	達磨	起たがる/たるま	東京大学総合図書館
	2	はやきあし達磨	達磨	かろくもはやきあし/達磨	国立歴史民俗博物館
	3	豆太鼓あし乃達磨	達磨/でんでん太鼓	豆太鼓/達磨	国立歴史民俗博物館
	4	持遊ひもふんだるたるま	達磨/鯛/まさる	一日も寝ずに/軽々/野せん豆/たるま	国立歴史民俗博物館
	5	竹馬乃友だち…おきあがり小法師	達磨/春駒	寝もせで/おきあがり/まめに	国立歴史民俗博物館
	6	はるのこま	達磨/春駒	かるかる/二つ三つ/あがれ/はるのこま	国立歴史民俗博物館
	7	寝た事のないだるま…風車	達磨/犬張子/風車	寝た事のない/じつとして居ぬ/かるすぎて/達磨/風車	国立歴史民俗博物館
	8	もてあそぶ犬や達磨	達磨/犬張子/でんでん太鼓	軽く/湯のふ峠をらくに越へけり/達磨/犬	国立歴史民俗博物館
	9	童子・達磨	達磨		国立歴史民俗博物館
	10	達磨も犬も疱瘡の見舞	達磨/犬張子/鯛/まさる	かるき/達磨/犬	国立歴史民俗博物館
	11	富士山・為朝・鍾馗・達磨①	達磨/源為朝/鍾馗/富士山	富士ほどに山をあげ/たるま/為とも/正氣	国立歴史民俗博物館
	12	富士山・為朝・鍾馗・達磨②	達磨/源為朝/鍾馗/富士山	富士ほどに山をあげ/たるま/為とも/正氣	国立歴史民俗博物館
	13	富士山・為朝・鍾馗・達磨③	達磨/源為朝/鍾馗/富士山	おきる/かるかる/張上ける富士/朱だるま/為とも/正氣	国立歴史民俗博物館
	14	富士山・為朝・鍾馗・達磨④	達磨/鯛車/源為朝/鍾馗/富士山	富士ほどに山をあげ/だるま/為とも/正氣	国立歴史民俗博物館
	15	富士山・為朝・達磨・金太郎	達磨/犬張子/金太郎/源為朝/富士山	かろく/山もあげたる/はりぬきの不二	東京大学総合図書館
	16	富士山・為朝・鍾馗・達磨・桃太郎	達磨/犬張子/兎/鯛/まさる/桃太郎/源為朝/鍾馗/富士山	かろかろ/ふしの山/上る	東京大学総合図書館
	17	鯛車	鯛車	かるかる/鯛/えびす/万歳	東京大学総合図書館
	18	木菟・豆太鼓	木菟/でんでん太鼓	かほに三つ四つ/豆太鼓	国立歴史民俗博物館
	19	羽子板・羽根・鞠	達磨/羽子板/羽根/鞠	かろく/にえはご板/羽根/鞠	国立歴史民俗博物館

(1)紅一色摺	20	なりふり太鼓…春の若駒	春駒/でんでん太鼓	春の若駒/なりふり太鼓	日本医学文化保存会
	21	早咲の梅…色よき犬のあし跡	犬張子/春駒	二ツ三ツ/犬/梅	日本大学医学部図書館
	22	童子と犬張子	犬張子	かるく/かるき/いぬはり子	武田科学振興財団杏雨書屋
	23	獅子の勇ミ顔	獅子頭/太鼓	獅子舞	東京大学総合図書館
	24	十二峠も祝ふ獅子舞	獅子頭/太鼓	軽く/十二峠も祝ふ/曲鞠	日本大学医学部図書館
	25	たかくあぐる怪童	金太郎	山/たかくあぐる	東京都江戸東京博物館
	26	かるかると斧もてあそぶ疱瘡が子	金太郎	かるかる/山あげる	東京都立中央図書館
	27	紅梅…喜目舞	達磨/木菟	軽々/軽し/大角豆/えびす講/紅梅	国立歴史民俗博物館
	28	鍾馗大臣	鍾馗	あとなく/鍾馗大臣	東京大学総合図書館
(2)図柄紅文字黒	29	獅子舞他	達磨/犬張子/鯛/獅子舞/源為朝/鬼	だるま/いぬ/しばらく	国立歴史民俗博物館
	30	豆州八丈島鎮守正一位八郎大明神正像	源為朝	八郎大明神/為朝伝説/老翁	内藤記念くすり博物館
	31	疱瘡養生艸	達磨/犬張子/兎/でんでん太鼓/鞠/源為朝/鍾馗	山あがらぬ/南天の実	国立歴史民俗博物館
(3)多色摺簡素	32	素盛雄尊・管相丞・清正		梅/疫瘡の神/悪魔	日本医学文化保存会
	33	あづき・うさぎ・みみづく	木菟/兎/でんでん太鼓	かるく/豆太鼓/あづき/木菟/兎/豆太鼓	東京都江戸東京博物館
	34	木菟・為朝大明神	木菟	為朝大明神	国立歴史民俗博物館
	35	達磨・木菟	達磨/木菟	為朝大明神	国立歴史民俗博物館
	36	中村芝翫九変化ノ内	鍾馗/青鬼	せうき	日本医学文化保存会
(4)多色摺複雑	37	疱瘡退除の圖	源為朝/疱瘡神(赤/発疹)	ためともさま/ほうそう神	日本医学文化保存会
	38	鎮西八郎為朝・疫鬼	源為朝/疫鬼(老翁)	鎮西八郎為朝/疫鬼	不明
	39	為朝の武威疫鬼神を退く図	源為朝/疫鬼神(発疹)	為朝/疫鬼神	順天堂大学山崎文庫
	40	八丈島の鎮守正一位為朝大明神来由	源為朝	為朝大明神/為朝伝説/痘瘡を護る神	日本医学文化保存会
	41	鎮西八郎為朝・疱瘡神	犬張子/木菟/兎/鯛/まさる/源為朝/童子/老婆/犬/兎/熊	鎮西八郎為朝/疱瘡神	日本医学文化保存会
	42	天岩戸・為朝・八岐大蛇退治	達磨/風車/源為朝/疱瘡神7体		国立歴史民俗博物館
	43	為朝他	達磨/犬張子/木菟/源為朝	源為朝/為朝伝説	国立歴史民俗博物館
44	牛頭天王他	痘瘡	痘瘡	東京都立中央図書館	



【図1】 No.3 豆太鼓あし乃達磨
(仮題)

紅一色摺りで、達磨とでんでん太鼓の図柄が描かれる。文言は「□□□□□□□□□□豆太鼓あし乃だるまも□らぬ稚子が茂の□清□」と書かれる。倒れても起き上がる達磨の図柄と、小児の遊び物であると同時に成長を願うための縁起物であるでんでん太鼓の図柄と、「豆太鼓」の「豆(疱瘡の膿疱)」という文言が、疱瘡治病に効力を持たせている。(国立歴史民俗博物館所蔵)



【図2】 No.8 もてあそぶ犬や達磨
(仮題)

紅一色摺りで、達磨、犬張子、でんでん太鼓の図柄が描かれる。文言は「もてあそぶ犬や達磨にも軽く湯のふ峠を楽に越へけり」と書かれる。「去ぬ」に掛けて病気が去ることを意味する犬張子が達磨、でんでん太鼓と共に描かれる。「軽く」や「峠を楽に越へけり」という文言によって、疱瘡の症状が軽いことや、快方へ向かうことを予祝する効力を持たせている。(国立歴史民俗博物館所蔵)



【図3】No.14 富士山・為朝・
鍾馗・達磨④（仮題）

紅一色摺りで、富士山、為朝、
鍾馗、達磨の図柄が描かれる。文
言は「疱瘡の身も富士ほどに山を
あげ正氣ですぐ壽だるま為とも」
と書かれる。富士山の図柄と「山
をあげ」という文言によって、山
上げの段階を過ぎ、快方へ向かう
ことを予祝する。（国立歴史博物
館所蔵）



【図4】No.38 鎮西八郎為朝・
疫鬼（仮題）

4色以上用いた複雑な多色摺り
で、源為朝が弓をもって、幣束を
刺した筏に乗って海を漂流する
赤い服を着た疫鬼を退治する図柄
が描かれる。（ジュリー・アンダー
ソン、エム・バーンズ、エマ・シャ
クルトン『アートで見る医学の歴史』
2012、河出書房新社より）



【図5】No.41 鎮西八郎為朝・疱瘡神（仮題）

4色以上用いた複雑な多色摺りで、弓を持つ源為朝が、複数の疱瘡神を調伏する様子が描かれている。疱瘡神は、赤い達磨や赤い木菟、犬張子、兎、まさるを持った熊、老婆、赤い服を着た童子などの姿で描かれる。おそらく『椿説弓張月』に書かれる、八丈島における為朝の疱瘡神調伏の様子を描いたもので、本来手の無いはずの達磨が手を出して額突き、老婆は八丈島の民を疱瘡に罹病させないという誓いの手判を持ち、童子は疱瘡神への供物とされる棧俵にのった赤い疱瘡団子を食べている。（中野操『錦絵医学民俗志』1980、金原出版より、日本医学文化保存会所蔵）